

リベルタン文学と 政治的中傷パンフレット

関 谷 一 彦

I. はじめに

ダニエル・モルネは、『フランス革命の知的起源』の中で、知性が革命の準備にどのような役割を果たしたのかを、膨大な資料を渉猟しながら明らかにしようとしている¹⁾。資料に語らせるという実証的方法は、予断や偏見、誤謬を排除するという点では有効な手段であり、説得力がある。また、こうした方法に基づく研究が彼のあとに続くことによって、あるときはモルネの主張をより強固にし、またあるときは修正するであろう。モルネ自身も自分の方法論を自覚していて、「序」の中で、「十分な数の事実を手掛けさえするならば、あとは調査をさらに増やし深めても、比率は変わらず、資料を増やすだけのことになる。[……] 最悪の場合にも、私の書物が出発点となって地方調査が行われ、私の調査を明確にし、それに肉付けをし、あるいはそれに異議をはさむようになることを願う²⁾」と述べている。その一方で、モルネはテーヌの「革命的精神」が虚構であると言って批判する。また、結論ははじめから決まっており、自らの主張を裏づけるために数十冊の著作の中から数十の文章や、同じくらの数

1) Daniel Mornet, *Les Origines intellectuelles de la Révolution française (1715-1787)*, Librairie Armand Colin, 1933; 邦訳、ダニエル・モルネ『フランス革命の知的起源』坂田太郎、山田九朗他訳、勁草書房、1971。

2) *Ibid.*, p. 3; 邦訳、同上書、p. 4. なお、訳文はいちいち断らないが、適宜修正を加えた。

の事実を覚書や書簡の中から借用していると激しく非難する³⁾。では、モルネはフランス革命の起源をどこに見出しているのだろうか？

それは、まずは宗教に敵対する精神、そして不信心の哲学、そしてその後を追うように広まった政治的不安にあるという。こうした知的精神は、モルネによると、観察と実験を重んじる習慣に支えられ、伝播していく。モルネが注目するのは、この伝播である。知的精神がどのように伝播していったのか、彼が地方の古文書館を回って調査するのはまさにこの伝播なのである。途方もない数の資料を読み込む労苦に比べて、モルネが引き出した結論は単純明快である。彼はフランス革命の知的起源を探ろうとしたが、その起源は知性だけでなく、貧困による政治的不安との共犯だというわけだ。知的起源を探りながら、その結論は知性からかけ離れた政治的不安との共犯という結論は、タイトルを欺いているとも言えるが、フランス革命の核心を明らかにしている。

しかしながら、こうしたモルネの研究に問題がないわけではない。彼が調査によって明らかにしようとしているのは数量に基づく研究であって、数量的研究は指標にはなるが、それによってすべてが説明できるわけではないからだ。18世紀の言説がどのようにして受容され、消化吸收され、発信されていったかという中身の問題、いわば質的研究もそれに加えることが必要である⁴⁾。また、モルネはフランス革命の知的起源を探求するあまり、知的でない部分には目を向けようとはしない。彼はダルジャンスについて、章を割いてまで言及しているが、ダルジャンスの作品と思われる『女哲学者テレーズ』には決して触れない。作品名を挙げているだけである⁵⁾。哲学書の伝播には最大限の注意が払われているが、現在ではリバルタン文学と位置づけられる非道徳的な猥褻作品は、モルネの研究からは抜け落ちている。しかし、当時はこうした猥褻な地下

3) とりわけ同上書の「結論」を参照のこと。

4) そこに切り込んだのが、ロジェ・シャルチエの『フランス革命の文化的起源』である。
Cf. Roger Chartier, *Les origines culturelles de la Révolution française*, Éditions du Seuil, 1990; 邦訳、ロジェ・シャルチエ『フランス革命の文化的起源』松浦義弘訳、岩波書店、1999。

5) *Ibid.*, p. 120 et p. 132; 邦訳、同上書、p. 171および p. 190。

文書は「哲学書」に分類されていたことを考えれば、その伝播はフランス革命の知的起源に含めるべきだったのではないか。したがって、本論ではリベルタン文学、とりわけ政治的中傷パンフレットを取り上げて、それがフランス革命に何らかの影響を与えたのかどうかを考えてみたい。われわれが取り上げるテキストは国王ルイ16世とマリー=アントワネットを中傷し、彼女とアルトワ伯爵との情事をテーマとするパンフレット「シャルロとトワネットの恋」である。しかしながら、リベルタン文学を扱う際に最初に出会う困難は、リベルタン文学をどのように位置づけるかという問題である。というのも、一言でリベルタン文学と言っても、その中身は多様で定義づけがなかなか難しいからだ。まずは、リベルタン文学をどのように定義づけるのか、そしてなぜリベルタン文学が18世紀に花開いたのかという問題から考えてみたい。

Ⅱ. リベルタン文学が開花する背景

リベルタン文学を考える上で重要なのは、「リベルタン」(libertin) という語がもつ意味である。ローマ時代の「解放奴隷の子」を意味する形容詞 <libertinus> を語源とする「リベルタン」は、時代とともに大きく意味を変えていく⁶⁾。「リベルタン」という語は、17世紀では形容詞「自由思想の」、また名詞「自由思想家」が使われるが、ここで言う「自由」とはキリスト教のスコラ哲学からの逸脱と深くかかわっている。17世紀の終わりから18世紀になると、「リベルタン」という語には「放縦な」、「放蕩な」、「卑猥な」という意味の形容詞、および「放縦な者」、「放埒な者」、「放蕩者」という名詞が付加される。キリスト教思想の逸脱からキリスト教の道德規範にとられない者へ、そして道德規範からの逸脱が性的モラルの逸脱へと変化し、放蕩者となる。このような「リベルタン」という語の意味の変遷、またリベルタン文学の流れから読み取れるのは、キリスト教が作り上げたスコラ的な既成の秩序を逸脱した、

6) このあたりのことは、拙著『閨房哲学』人文書院、2014の「訳者解説」、pp. 330-332を参照のこと。

反キリスト教的、反宗教的な意味から、既成秩序であるキリスト教モラルから逸脱した、非道徳的、反逆的な意味である。とりわけわれわれにとって注目すべきは、リベルタンの意味が、宗教的な逸脱である「自由思想家」から、モラルの逸脱である「放蕩者」へと意味を変えていく点だ。また、この語は18世紀に入ると文学にも用いられるようになり、クレビヨンやラクロの作品に見られるような上流階級の性的戯れを描き出した作品を指すようになる。

しかしながら、リベルタン文学というジャンルについては複雑である。というのも、クレビヨン・フィスの艶やかな社交界の登場人物を描いた作品から、性を露骨に描写したサドのテキストに至るまで、リベルタン文学の中身があまりにも多様であり、一つのジャンルとして定義するのがきわめて困難であるからだ。では、いわゆる「リベルタン文学」に共通する要素とは何なのだろうか？それは「性」であり、反逆的「逸脱」だ。明示的であるにしろ、ないにしろ、「性」はリベルタン文学に通底したテーマであり、「逸脱」はキリスト教の教えから逸脱した者、モラルから逸脱した者を指すように、リベルタン文学を特徴づけるものである。では「性」と「逸脱」にかかわるリベルタン文学が、なぜフランス18世紀に現れ、読まれるようになったのだろうか？

実はリベルタン文学は18世紀に忽然と現れたのではない。その源流はルネッサンスに遡り、ピエトロ・アレティーノの『淫らなるソネット集』や『ラジオナメンティ』を始めとして、17世紀には『娘たちの学校』（作者不詳）やショリエの『女たちの学園』に継承され、18世紀になると暗示的に、あるいは直截に性を描く作品が増えていく。こうした流れの根本にあるのは、キリスト教に敵対する精神である。モルネによると、1750年頃まではこうした精神の伝播は限定的なものであったが、1750年以降教会はしだいに信仰を力によって強制する権利を否認されることになる。1770年以後では世論は信仰の自由や礼拝の自由が当然の権利だと考え始める。とくにモルネが強調しているのは、こうした精神が18世紀を通して、一部ではなく、フランス全体に確実に広がっていったことである。彼が実証しようとしたのは、まさにこうした拡がりや深化がどのようにして進展していったのかという点であり、モルネのデータ分析は現在で

も生きていけると言えるだろう。

われわれにとっての関心は、こうしたキリスト教に敵対する精神にリベルタン文学がどのようにかかわったのかという点だ。クレビヨン・フィスやラクロの小説が描き出す艶っぽい繊細で洗練された上流階級の世界は、一見キリスト教に敵対する精神とは何の関係もないように見える。しかし、そこに描かれているのはキリスト教が説く禁欲の教えから逸脱した欲望の世界だ。一夫一婦制を制度としては受け入れながら、小説世界の現実には性をめぐる人間関係がテーマであり、習慣を尊重しながらも、欲望を肯定的にとらえていて、キリスト教のモラルから逸脱している。『女哲学者テレーズ』の場合は、もっとわかりやすい。物語は、「カディエールとジラルルの訴訟」という実話をもとにしており、それは神父ジラルルが告解者のカディエールを誑かして強姦し、墮胎させた、当時ヨーロッパで大スキャンダルになった事件を描き出している⁷⁾。腐敗、退廃したキリスト教の聖職者たちの行動を描くことによって、当時の読者はいやが上にもキリスト教に対する批判を増幅させていったことだろう。また、『女哲学者テレーズ』はよく読まれたことから、何度も刷られ、海賊版も出回り、エロティックな挿絵が入った版も多かったために、字が読めない人々にもその内容を伝えることができたと考えられる。「性」の描き方が暗示的であれ、直截的であれ、リベルタン文学はキリスト教に敵対する精神の伝播に幅広くかわり、読者の怒りを深化させたことは間違いがないであろう。しかも18世紀を通して、モルネも指摘しているように、リベルタン文学の数が次第に増えていることから、フランス革命に至るまでに、キリスト教に対する批判精神はより幅広く、より深化していったことに疑いの余地がない。

では、「性」を描くリベルタン文学が18世紀に開花した理由はどこにあるのだろうか？それには、よく言われるように摂政時代の開放的な雰囲気に関係しているのではないか。またこうした雰囲気は、ヴァトーやブーシェの絵画から具体的にうかがえる。いずれにしろ欲望の肯定は、現世の幸福と深く結びついている。それはキリスト教が説くあの世の幸福ではなく、「今、ここでの幸福」

7) 詳細は、拙訳『女哲学者テレーズ』人文書院、2010の「訳者解説」を参照のこと。

である。あの世の幸福から、「今、ここでの幸福」への意識の変化は重要である。というのも、「今、ここでの幸福」はあの世の存在を疑問に付し、神の存在に対する疑問を導くからだ。こうした疑問は、これまで当たり前のように考えられていた神を中心として精緻に構築されたキリスト教世界に、疑いを生じさせることになる。ただひたすら信じてきた自らの信仰心に微かな疑いの芽が生まれ、その芽は成長し、根付いていく。それは、18世紀に生きた人々の個人的な、内面の問題であり、21世紀に生きるわれわれにはなかなか見えにくい問題である。しかし、キリスト教に対する疑問の拡大が歴史的な事実であることに着目するなら、当時の人々の内面における疑問の拡大が推測できる。こうした内面の変化に、「性」が果たした役割は小さくないと考えられる。というのも、性的快楽は禁じられていようが実感できる快楽であり、それは感覚に訴え、全身で感じられる疑うことができない、現前する「今、ここでの幸福」であるからだ。そういう意味では、キリスト教に敵対する精神が、「性」を描くりベルタン文学として現れたことは驚くには当たらない。キリスト教が説くモラルへの批判、とりわけ性的モラルへの批判をリベルタン文学はよく表しているからだ。

「性」はまた、個人的欲望であることから、個人を意識させる。自分は一人で生まれてきて、一人で死んでいく個別の存在であること、自分は独自の存在であり、独自の快楽を感じ取る存在であることを「性」は教えてくれる。

こうした意識の変革に「性」を描くりベルタン文学が果たした役割は大きいと考えられるが、こうした意識の変革はまた、18世紀を貫いている哲学的志向と切り離すことはできない。実験を重視する合理的な考え方が、『女哲学者テレーズ』に見られるように、キリスト教を批判するリベルタン文学にしっかりと入り込んでいるからだ。

さらに、キリスト教に敵対する精神は、「今、ここでの幸福」に目を向けることによって、18世紀の社会、政治に関心を向けるようになる。モルネは、1748年以前は「政治のことはほとんど誰も考えていない⁸⁾」が、1748年から

8) Mornet, *op. cit.*, p. 472; 邦訳、前掲書(下)、p. 688.

1770年になると「議論ははるかに多くなり、だんだんと具体性を増してゆき、そして格段に大胆になる⁹⁾」と述べ、1770年以後になると「国家の秩序そのものを、時にはむごたらしく告発する著作が現れる¹⁰⁾」と政治に対する意識の変化を指摘している。また彼は、「1770年以後になると、社会的・政治的不安あるいは少なくとも社会的・政治的な問題関心が、大規模に広まってくる事が確認される¹¹⁾」と述べて、文人層や貴族層だけでなく、中・小ブルジョアジー、青年、コレージュの中まで、社会的・政治的関心が広まってくると具体的に言及している¹²⁾。モルネのフランス革命における知的起源探求の結論は、先にも述べたように、民衆の貧困と政治的不安が18世紀の啓蒙思想とともにフランス革命を導いたというものである。われわれの関心は、リベルタン文学が政治にどのようにかかわったのかを検討することである。本論では、革命直前にしだいにその数を増していった政治的中傷パンフレットを見てみることにしたい。こうした誹謗文書は、とりわけマリー=アントワネットに向けられたものが増えていく。その中でもフランス革命の前に書かれ、もっとも有名な「シャルロとトワネットの恋」を取り上げたい。

Ⅲ. 政治的中傷パンフレット「シャルロとトワネットの恋」

これまで翻訳がなかったので、まずはその訳を見てみることにしよう。

シャルロとトワネットの恋¹³⁾

-
- 9) *Ibid.*, p. 472; 邦訳、同上書、p. 688.
 10) *Ibid.*, pp. 472-473; 邦訳、同上書、p. 689.
 11) *Ibid.*, p. 473; 邦訳、同上書、p. 689.
 12) *Ibid.*, p. 473; 邦訳、同上書、p. 689.
 13) テキストは以下を用いた。*Les amours de Charlot et Toinette dans Anthologie érotique, Le XVIII^e siècle*, Éditions Robert Laffont, 2003. なお翻訳にあたっては、筆者の疑問を同僚の Olivier Birmann 氏が解いてくれた。ここに感謝の意を記したい。

V…¹⁴⁾で盗まれた作品

もちろんそれは天上の、諸神にとっても気にかかる、
難事で神もそのために、心配されるにちがいない。

ウェルギリウス 『アエネーイス』¹⁵⁾

1 7 7 9

若くて淫漣とした王妃

きわめて高貴な身分をもつその夫は妻を喜ばすことができない男

彼女はとても用心深い女で、時々

ちょっとした手仕事を巧みに利用して

苦しみを紛らわせていた

待つことにうんざりした精神と満足させてもらえない女陰の手仕事。

甘美な夢想の中で

彼女の可愛い、丸みを帯びた、裸の、全裸のほれほれとするような肉体は
ある時は柔らかい椅子のクッションの上で

愛の門番である、一本の指で、

昼間の気詰まりを夜に癒し

シテールの神に対して香を焚いていた。

ある時は真っ昼間に死ぬほど退屈で

彼女は褥にひとりぼっちで身をくねらせていた

ぴくぴく動く乳房、美しい目、そして口

そっと喘ぎ声を出し、半ば開いた口は

誇り高いセックスのお相手を挑発しているように思われた。

なまめかしい姿態で

14) ヴェルサイユ (Versailles) のこと。

15) ウェルギリウス 『アエネーイス』 第4巻、379-380. 引用は『アエネーイス (上)』
泉井久之助訳、岩波文庫、1976、p. 239.

アントワネットが望んでいたのは
 前戯にとどまることなく
 L…¹⁶⁾が彼女を満足させてくれることだった。
 しかし、この点についてわれわれは何を言えるだろうか？
 よく知られていることだが、哀れな国王は
 彼の健康を預かる医者によって
 3回あるいは4回宣告されている
 完全なる不能のせいで
 アントワネットを満足させることはできない。
 彼も良く自覚しているが
 彼の陰茎は
 1本の藁くずほどの大きさもなく
 いつもふにゃふにゃで首^{こうべ}を垂れている
 彼の一物は、下着の中で
 女とやる代わりに
 アンティオキアの亡き高位聖職者¹⁷⁾のように萎^{しぼ}んでいる。
 A…¹⁸⁾はある日恩寵の勝利を感じ
 性行為と情欲の再生する恩寵
 期待と不安を抱きながら王女の足下に跪き
 王女に話しかけようとするが何度も声を詰まらせ、
 彼女の手を自分の手で優しく愛撫し
 抑えきれない心の炎をしばしば燃え上がらせる
 彼はわずかに動揺を見せるが、彼女もまたかすかに動揺する。

16) 国王ルイ16世 (Louis XVI) のこと。

17) サモサタのポールのこと。アンティオキアの高位聖職者で、3世紀の有名な異端の指導者。パルミラの女王である有名なゼノビアによって保護された。ここではローマ皇帝アウレリアヌスに敗れたゼノビア同様に、敗者としてのイメージが異端と不能に結びつけて語られていると思われる。

18) アルトワ伯爵 (Artois) のこと。彼はルイ16世の弟で、将来のシャルル10世である。

結局トワネットに気に入られることは時間のかからない事であった
 王子や国王はすぐに性行為に及ぶ
 巧みに金箔をあしらった美しい寝室の中で
 暗くもなく、明るすぎることもない寝室
 ビロードで覆われた柔らかいソファの上で
 高貴な美しさの魅力が享受される
 王子は自分の一物を女神に見せる。
 性行為と愛情の恍惚の瞬間！
 胸は高鳴り、愛と羞恥心が
 この美女をきれいな赤で染めていく
 しかし羞恥心は消え、愛だけが残る
 王女は弱々しく身を守り、涙を流す。
 不遜なA…の目は魅了され、魔法にかけられたようになり
 美しい光に突き動かされ、これらの美しさの上を動き回る。
 ああ！いったい彼女の崇拜者にならない者がいるだろうか。
 色の白さを恥じ入っているような、良く回る首の下には
 二つの可愛い、離れている、均整の取れた乳房があり、
 愛によってゆっくりとぴくぴく動き、丸みを帯びる。
 それぞれの乳房の上には小さな薔薇が立ち上がっている。
 乳房、魅力的な乳房、それは決して休むことはなく
 あなたはその手を急ぐようにと誘っているようだ
 見つめる目も、キスをする口も。
 アントワネットは神聖化され、彼女のすべては魅力的だ
 彼女もまた分かちもつ甘美な快樂は
 新たな恩寵を彼女に与えているように思われ
 快樂が彼女を美しくし、愛が素晴らしい化粧となる。
 A…は彼女の肉体を暗記していて、体中にキスをする
 彼の一物は熾火^{おきび}となり、心は燃え盛る火となる

彼は彼女の美しい腕に、小さくて可愛い性器にキスをする
 またある時には尻に、乳房にキスをする
 丸く膨らんだ尻を優しく叩く
 腿、腹、臍、この上なく美しい女性器も叩く
 王子は常軌を逸したようにどこもかしこもキスをする
 悪ガキのような様子をしていることにも気づかず
 激しい欲情にすっかり興奮して
 交わりの^{まよ}的にあらゆる権利を引き出そうとする。
 アントワネットは嫌がるふりをする
 不意打ちに不安を抱き、体を許そうとはしない。
A…は一瞬をとらえる、それに負けたトワネットは
 最後には受け入れることの心地よさを感じる。
 愛が二人を優しく絡み合わせている間
 シャルルが彼女を抱きしめ、降参させている間も
 アントワネットは痙攣し、すでに彼女の目の中には
 神々の楽しみが現れている。
 彼らは幸福に触れる、しかし運命とは裏切り者である
 二人は呼び鈴の音を聞く…用心深い近習が
 余りにも服従に急ぐあまり、部屋に入ってきて二人の邪魔をする…
 扉を開け、姿を見せ…すべてを見て、その場を立ち去った
 ほんの一瞬の出来事だった。
A…は自分の失態に驚いて
 その場からすでに離れていた。
 王女は呻いていた
 目を落とし、顔を赤くしていた
 言葉を口にすることもなく、
 王子はもう一度キスをして、彼女を慰める
 «忘れてください、愛しい王女、この不運を忘れてください

余りにも用心深いこの粗忽者が
 われわれの幸福を遅らせたにしても
 苦しい不幸はしばしば
 快樂にさらに大きな力を与えるのです。
 さあ、この損失の埋め合わせをいたしましょう」とハンサムなA…は言った。
 再開しながら、彼は
 より大きな幸運を試そうとしていた
 それに対して王女は
 抵抗して嫌がっていた
 その抵抗が、二人の愛の陶醉をより刺激的にしていた
 そしてまた彼女の可愛い宝物をよりよく開陳していた。
 読者の皆さん、わたしたちの恋人のセックスはあまりにも激しく
 肛門性交をしているときに二人の秘密が露呈した。
 再びジェルヴェ氏がやってきた
 «陛下、いかがなさいましたか?»——«ああ、何てことだ! わざとだな»
 とA…は怒って続けた。
 «なぜ彼がやってきたのか訳が分からない
 なんて残酷な見張り人たちだ
 いつもこうした場面で、これらの召使たちはなぜ邪魔をしにやって来るの
 か?»
 王女は訳が分からない…やがて二人は、下僕たちの勘違いから
 正気に戻るや否や
 隅々に至るまで
 最大限の注意を払って調べて回る
 こうした不実の出来事の原因が
 どこにあるのかを見つけるために
 しかし彼らは何一つ見つけることはできない、愛は休止を嘆いている
 王女は嘆き、嗚咽を漏らす

そして気を失ったように倒れこんでしまう
 彼女の不貞の無言の証人である
 積み上げられたクッションの上に。
 そのとき謎は解け、彼女の美しい肉体は
 彼らの情欲の炎を妨げていたものを見出す…それは呪われた呼び鈴のリボンだ
 リボンの房が
 昼間のこれらの出来事の
 二人の邪魔をした、呪うべき原因であり
 その房は、二つのクッションの間に挟まれていた…
 シプリス¹⁹⁾で味わうさまざまな幸福の
 愛の交わりの高揚のたびに
 呼び鈴の大きな音が陶酔を漏らす。
 ああ、どれほどの放蕩者が捕らえられることが
 彼らが陶酔しているときに
 呼び鈴のリボンを引いていたとしたら。
 我が恋人たちは安心して愛を祝う
 2回あるいは3回も、日が暮れる前に
 快樂のただ中に浸りきった二人は
 彼らの大切な前戯を味わっているように見える。
 日々、より幸福になり、より愛するようになった二人は
 ビーナナスに常に忠実な炎を捧げる
 彼らはよくセックスをする、そして愛と時間は
 これらの幸福な恋人にとっては、飛んではいけない。
 私はと言えば、巨額の財産に恵まれても

19) シプリス (Cypris) とはローマ神話のウェヌスの異名。シプリス島の近くで生まれたのでこの名があるが、ここでは女性器を指す。Cf. Marie-Françoise LE PENNEC, « Cypris », *Petit glossaire du langage érotique aux XVII^e et XVIII^e siècles*, Collection « LA PAROLE DEBOUT », Éditions BORDERIE, 1979.

笑いもセックスも楽しみもない生活を強いられるくらいなら
 このような不幸から逃れるために
 自分の一物をちょん切る方がいい。
 人がわれわれに美德について語るとき
 それはしばしば妬みによってである
 というのもわれわれの父の性行為がなかったとしたら
 われわれは結局生まれて来なかったからである。

モーリス・ルヴェは『エロティックな傑作集』²⁰⁾の中で、この「シャルロとトワネットの恋」について解説をしていて、その中で作者に関するパリ警視総監のルノワールの言葉を引用している。「ポーマルシェが「シャルロとトワネットの恋」というタイトルの版画入りの中傷文を作り、ロンドンにもっていき、そこで印刷をしたというのは、たぶんという以上のものがある²¹⁾」。ルノワールの言葉をそのまま信じていいのかどうか疑問が残るが、このような中傷パンフレットの流通経路を辿るには、警察の古文書しかないとルヴェは述べている²²⁾。作者がポーマルシェであるかどうかは別にして、この作品には暗示的な表現が多用されていて、品位を感じさせるものがあることは確かだ。したがって、作者および作品の出資者はおそらく上流階級であり、宮廷に近い人物である可能性が高いと考えられる。実際に王女の寝室の描写があり、写実的な描き方からは宮廷内部と何らかの関係を匂わせるものがある。また、冒頭を飾るウエルギリウスの『アエネーイス』からの引用や、「アンティオキアの頭のおかしい高位聖職者」、「シプリスで味わうさまざまな幸福の」などの固有名詞を用いた表現からは教養が感じられ、単純な非難中傷の枠組みに収まらない文才を感じさせる。とは言え、マリー=アントワネットとアルトワ伯爵との不倫

20) Maurice Lever, *Marie-Antoinette: Icône d'une pornographie politique dans Anthologie érotique, Le XVIII^e siècle*, Éditions Robert Laffont, 2003, pp. 1029-1038.

21) *Ibid.*, p. 1032.

22) *Ibid.*

の恋を題材にしたテキストは、政治の中枢にいる二人、さらには政治権力の頂点に位置する国王を誹謗する目的をもっている。こうした国王や王女を誹謗する文書が一体いつ頃から拡がり始めたかについて、ルヴェは「1785年の首飾り事件のあと、国王夫妻への中傷が堰を切る²³⁾」と述べて、首飾り事件が一つのきっかけであることを示唆している。

革命が近づくにつれ、増殖していく政治的パンフレットから、われわれはリバルタン文学が政治的パンフレットに与えている影響を読み取ることができる。というのも、国王夫妻を中傷するこうしたパンフレットにおいて、批判の矛先は国王の性的不能であり、マリー=アントワネットの過剰な性欲であり、「性」が対象になっているからである。では、なぜ「性」を通して批判が展開されているのであろうか？ 批判と「性」には何らかの必然性があるのだろうか？

IV. 批判と「性」

このパンフレットが描き出すルイ16世のイメージは、性的不能の国王である。冒頭から「妻を喜ばすことができない男」として紹介され、また「哀れな国王」と決めつけられたルイ16世に対する攻撃材料は、「完全なる不能のせいで／アントワネットを満足させることはできない」という国王の「性」にかかわるものだ。作者はまた、「彼の陰茎は／1本の藁くずほどの大きさもなく／いつもふにゃふにゃで首を垂れている」と述べて、国王の男性器そのものに欠陥があることを公言し、攻撃する。その一方で、マリー=アントワネットのイメージは、「性的快楽」に貪欲で、寂しさを紛らわせるためにオナニーにふけり、アルトワ伯爵との性行為に欲望に負けてのめり込んでいくというものだ。「シャルロとトワネットの恋」では、アルトワ伯爵の誘惑に負ける受け身のマリー=アントワネットが描かれているが、1791年に出た『マリー=アントワネットの色情狂』(*Fureurs utérines de Marie-Antoinette*)では、彼女は「色情狂」

23) *Ibid.*, p. 1033.

として描かれ、革命の進行とともにそのイメージは変化していく。しかしながら、やはり攻撃の対象は王女の「性」にかかわるものである。

このように「性」を通して人を攻撃する手法は、現在でもよく見られる手法だ。メディアが伝えるニュースの中に、性的スキャンダルがいかに多いことか。週刊誌には必ず誰かの性的スキャンダルが掲載され、人口に膾炙していく。それが持続する背景には、読者がいるからであり、読者の欲望が需要を支えている。ではなぜ「性」が攻撃対象となるのだろうか？それは、「性」が本来秘められたものであり、それゆえにこそ誰しもの関心を呼ぶからではないか。しかも「性」は誰もがかかわるものであるのに、人前で話すことが憚られるテーマである。また、キリスト教では性行為は生殖のためのものであり、快楽のためのものではなく、過剰な性的欲望は罪であり、許されないものである。しかしながら、パンフレットに見られる批判は、キリスト教のモラルの側からの批判である。リベルタン文学が、モラルからの逸脱を説いていたのとは逆に、モラルから批判を加えるのは矛盾をきたしている。ここには、リベルタン文学の定義とは相容れない異質な要素、つまり政治的中傷パンフレットの特殊性を見出すことができる。この点では、「シャルロとトワネットの恋」の論理は、キリスト教のモラルを痛烈に批判するサドのテキストと対極にあることがわかるだろう。さらに、性的モラルの堅持は、一般にキリスト教世界以外でも同様に求められる。では「性」とは危険なものだろうか？

フランス18世紀では、「性」を露骨に扱ったリベルタン文学は禁書であった。それは哲学書と同じ扱いで危険なものと思われ、検閲の対象であった。「性」が危険であると思われするのはなぜなのか？先にも述べたように、歴史的には、性は隠すべきものであり、日常の世界に堂々と顔を出すべきものではなく、大声で語るべきものでもなかった。性についての意識は変化したとはいえ、今でも人前で語ることには躊躇^{ためら}いがあり、露骨な表現は人の羞恥心を傷つけ、品のないこととされる。人間社会の日常が、理性、労働、論理、秩序、言語の世界であるとすれば、性の世界は非日常であり、欲望、祭り、非論理、無秩序、沈黙の世界に属するだろう。それはまた人間がもつ動物性、暴力性をもっとも

よく表わしているとも言える。こうした野獣性、暴力性を「性」が含みもつことが、危険である要因ではないか。ロベスピエールもナポレオンもサドが大嫌いであった。権力の側から見ると、サドは危険で、おぞましい存在であるだろう。サドを認めることは、秩序に綻びを許すことになるからだ。したがって、歴史を振り返るなら、権力にとって「性」は危険であると言える。

こうした「性」の意味を考えると、「シャルロとトワネットの恋」が国王と王女の「性」を通して批判することは、キリスト教のモラルを論拠にしているとしても、攻撃によるインパクトは大きなものがあるだろう。この大きさこそ、このパンフレットも現在の週刊誌も、時を隔てながら同じ戦略を用いる根拠になっていると考えられる。「性」は危険であると同時に、攻撃の武器にもなりうるのである。

V. おわりに

われわれは、リベルタン文学がなぜ18世紀に現われ、よく読まれるようになったのかを検討し、また「シャルロとトワネットの恋」のテキストを通して、批判と「性」について考えてきた。重要な点は、「逸脱」と「性」にかかわるリベルタン文学が、キリスト教に敵対する精神を育み、観念的なあの世の幸福から現実的なこの世の幸福へと意識を変革するのに貢献したのではないかという点である。この意識変革に「性的快楽」が果たした役割は決して小さくないと考えられる。というのも、キリスト教は性行為に快楽を禁じたが、性行為がもたらす快楽は、禁じられていようが全身で感じられる疑うことができない、現前する快楽であるからだ。またこうした快楽が生み出す幸福は、キリスト教が禁じれば禁じるほど大きくなる。性はバタイユが指摘するように、禁じられれば禁じられるほど、それを違反しようとして、より大きなエロティシズムを生み出すからだ²⁴⁾。したがって、「性的快楽」がもたらす実感できる快楽は、現実に目を向けさせ、現実批判、社会批判へと向かうことになる。17世紀の

24) Georges Bataille, *L'Erotisme*, Les Éditions de Minuit, 1957.

ラ・モット・ル・ヴァイエヤノーデ、ガッサンディとギイ・パタンのようなリベルタンたちは、神の観念は先天的なものでも、デカルトの言う「本有的」なものでもなく、人間の弱さから生まれた虚妄、幻影であるとして、宗教の人為性を主張する。彼らによると、それは文化的、社会的、とりわけ政治的強制の結果に他ならない²⁵⁾。宗教の起源は政治家のペテンであるとするこうした考えは、宗教批判を政治批判へと向かわせる思想を内包している。実際に社会への関心は、モルネの指摘にもみられるように、政治制度についての問題へと向かっていった。こうした文脈の中に、「シャルロとトワネットの恋」は位置づけられなければならない。つまり、このテキストはリベルタン文学の流れの中に位置しているのである。

「シャルロとトワネットの恋」は、王家内部への性的中傷パンフレットであるが、こうした中傷パンフレットには、攻撃のみならず、笑いの要素が内包されている。国王の男性器についての描写や、王女マリー=アントワネットとアルトワ伯爵との情事の妨げになっていたのは、呼び鈴のリボンであるなど、これらは笑いを誘う要素である。「性」は隠された部分であるだけに、それを表に出すことは滑稽なことであり、笑いを誘うのであろう。日本の春画を「笑い絵」と言っていたことから、**「性」と「笑い」**には何らかの結びつきがあるのではないか。

ではリベルタン文学は、フランス革命に影響を与えたのだろうか？ 哲学と「性」がともに語られている『女哲学者テレーズ』のような作品が与えた影響は、間接的であり、具体的に把握するのが困難であるが、政治的中傷パンフレットは、読者の欲望により直接的に訴えかけ、読者の日常に入り込む。サドはこうしたパンフレットを批判しているが²⁶⁾、自分は『閨房哲学』の中に「フランス人よ、共和主義者になりたければあと一息だ」という長文のパンフレット

25) 赤木昭三『フランス近代の反宗教思想』岩波書店、1993、p. 29.

26) Sade, *Histoire de Juliette dans Sade, Œuvres*, « Bibliothèque de la Pléiade », t. III, 1998, p. 591.

トを挿入している²⁷⁾。おそらくパンフレットという手段が、読者に対する有効な手段と認識していたからこそ利用したに違いない。このことから、パンフレットが当時よく読まれ、インパクトを与える有効な手段であったと考えられる。では、政治的中傷パンフレットの役割とはどのようなものだろうか？それは、王権の権威の失墜だ。革命以後、政治的中傷パンフレットは質量ともに増殖していくが、こうした中傷パンフレットに触れることによって、政治が身近な問題として、「今、この問題」としてしだいに認識されていったのではないか。リベルタン文学が形を変えて現れたこうした政治的中傷パンフレットが、革命前に、そして革命中に、歴史に与えた影響は決して小さくはなかつただろう。民衆の意識が国王から離れ、王女への憎しみを拡大させるのに、しかも急速に意識変革を促進するのに、迅速な情報伝達手段でもある政治的中傷パンフレットは、その質・量を勘案すると有効に機能したと考えられるからだ。リベルタン文学全体が、18世紀の意識変革にどのような役割を果たしたのか、さらにより多くのテキストを検討しながら明らかにしていくのが今後の課題である。

【付記】

本論は「18世紀フランスのリベルタン文学と版画がフランス革命に果たした役割についての研究」(基盤研究(C)、課題番号：15K02397)を研究課題として、日本学術振興会科研費平成27-30年度の助成を受けた研究に基づくものである。

27) *Ibid.*, pp. 110-153.